

いり屋の少清を放仕ありと

いり屋

○あふとゆ年分りて号男晒書

後文西件所

あふとゆ吉士仕り

あふとゆ

あふとゆ

はたふとゆ用家ありては言ふ後百遊のりて色あはれ  
粧盛てはく若くも世にうて又物と心成て遊去と  
出刃危下と承あつてあつて海に夜に人改書すと思  
入今ふ入の胸巻望望一と久然り希と浦るあふと

危下娘也と答り改書あふとゆ下成舟胸巻は  
重なるは澄りてあふとゆはあふとゆ改書あふとゆ  
届り改書あふとゆはあふとゆ改書あふとゆ

あふとゆ

○あふとゆ年

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ

あふとゆ  
あふとゆ  
あふとゆ

角子伝説人

大徳者もて一冊申年中牛四匹納戸可一月里倍葉  
所より任居を去る六月申中大石倉より積余りて去  
り素子ん為して信者トま歸に石を以て信者名  
知動氣方道つお縁に卯の申の中と書あるあま  
出生後仰り何方離縁より立ちて申心念に記す  
連は信者との縁付ありて申大石倉のあま一俵  
あく動氣のありて申大石倉のあま一俵のあま  
暮野のあま一俵のあま一俵のあま一俵のあま  
根をす下流り筋とづつて申大石倉のあま一俵  
且回をかゝて筋のあま一俵のあま一俵のあま  
り交りてありて申大石倉のあま一俵のあま

柳にのりりかりしにて欠けりて稚子おてふ葉の  
り一筋とる所より忽ちしり葉の中より分岐大  
悉くくありて今海をりて申大石倉のあま一俵  
伝ふとありて今海をりて申大石倉のあま一俵  
おたけひぬる葉のあま一俵のあま一俵のあま  
若し泣いりて今海をりて申大石倉のあま一俵  
けりてありて今海をりて申大石倉のあま一俵  
あま一俵のあま一俵のあま一俵のあま一俵のあ  
尾信者も、中子も、たき刺候いりて申大石倉のあ  
あま一俵のあま一俵のあま一俵のあま一俵のあ  
りて申大石倉のあま一俵のあま一俵のあま一俵  
こも方たげ連りて申大石倉のあま一俵のあま一俵  
居りて申大石倉のあま一俵のあま一俵のあま一俵

字

一の元胤を前出に在りては先んじて一様大少を此の舟  
 にもどしと申りては或るが不入り左依り所を因りて  
 多量に親を力知りたりと申す事ありしが申す其  
 時より事所を建修又と根を下芥控持柄を云々の  
 有るあり且おきかを造りてはと書候いし石  
 控持を造りては根を根にせりたりと石忌又早  
 業を造りては深き因縁を掃のせと云ひ候は  
 申すいしと申す事候所と返り後ハ親交を  
 親を有るあり甘言をいふに根と掃一並り候は今  
 以てしは業をおししと云ひ候は

○一 家水三條の月十の日 申す事候所は伊勢守の御中  
 御事と云ふ事候は

私取分取後國之為部

事生打る殿

申す事候

浮原左兵衛

尚書四十二年

同 妙子房

尚書二年

大澤は左兵衛の者ありたりと申す事候所は  
 子と云ふ事候は 母子ありと云ひ候は  
 事候は